

氏名(本籍)	まつだ 松田ひとみ(北海道)		
学位の種類	博士(ヒューマン・ケア科学)		
学位記番号	博乙第2097号		
学位授与年月日	平成17年2月28日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	ひとり暮らしの女性高齢者におけるルサンチマンと在宅療養生活を維持するための戦略		
主査	筑波大学教授	医学博士	戸村成男
副査	筑波大学教授	博士(医学)	紙屋克子
副査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己
副査	筑波大学講師	博士(医学)	堀孝文

## 論文の内容の要旨

### (目的)

わが国ではひとり暮らしの高齢者(住居内に同居人がなく、ひとりで生活を営んでいる65歳以上の者)が増加傾向にあり、そのうちの約8割が女性である。世界各国と比較し最も子どもや孫との同居志向が強いとされるわが国の高齢者が、なぜひとり暮らしを選択するのであろうか。著者自身によるこれまでの調査から、ひとり暮らしの女性高齢者は、在宅療養生活を維持するためにケア提供者に対して戦略(自分らしい暮らしを実現するために用いる作戦)を用いていること、戦略を用いる動機を強化しているものは、過去の苦悩や悔恨の体験であることが示唆された。この悔恨を礎としてひとり暮らしを成立させる経緯をみると、それはニーチェによるルサンチマンの見解と捉えられた。ここでルサンチマンとは、現在の暮らし方(居住形態や家族関係)に影響を及ぼす過去の悔恨の感情をいい、過去の苦悩の生活体験に対する悔恨の感情が、現在のひとり暮らしに価値と意味を付与しているとする概念である。現在までのところ、わが国の高齢者のルサンチマンに関して検討されたことはないが、病身の女性高齢者のひとり暮らしとその背景(家族関係や人生歴)を結びつける観点から重要な概念であると考えられる。

本研究は、女性高齢者の過去の苦悩の体験と現在のひとり暮らしの実現について、ルサンチマンによって関連性を見出し説明しようとするものであり、これを質的データによる分析と公式理論(ニーチェによるルサンチマン)の活用という手法によって探求するものである。また、これにより、介護ニーズのある女性高齢者が、ひとり暮らしを実現するために用いる戦略の過程を理論的に説明することを目的とする。

### (対象と方法)

B.GlaserとA.Straussによって開発されたグラウンデッド・セオリー法を用いて研究課題を検討した。対象は、訪問看護ステーションを利用し、意思疎通が可能な、北海道に住むひとり暮らしの女性高齢者31人(66～92歳、平均77.7±6.4(SD)歳)であった。半構造的な質問項目によるインタビューを行った。インタビューの内容は、女性高齢者の生活史として現在から過去に向けて質問し、徐々に個別的で具体的な質問へと変化させた。

インタビューによるデータ収集と分析と並行して、継続比較分析を行った。即ち、第一段階（open coding）、第二段階（axial coding）、第三段階（selective coding）を実施した。

### （結果）

①カテゴリーとサブカテゴリーの抽出（open coding）：オープンコーディングによって、ラベルをクラスタリングした結果、8個のカテゴリーと41個のサブカテゴリーを導き出すことができた。カテゴリーは「ひとり暮らしに伴うリスク因子」、「入院（施設入所を含む）を勧める家族」、「入院生活の回避」、「ルサンチマンの経験」、「ルサンチマンからの学び」、「ひとり暮らしを維持するための戦略」、「主役の地位の確保」と「家族関係の均衡を保つ」であった。②カテゴリーのパラダイムに基づく構成（axial coding）：各カテゴリーをパラダイムに基づいて関係づけるために、ひとり暮らしの理由とその背景について分析を繰り返し行い、ケア提供者に対して戦略を用いる動機との関連性を次のように見出した。「ひとり暮らしに伴うリスク因子(条件)」によって「入院を勧める家族（現象）」が出現し、「入院生活の回避」という文脈を導き出す。そして、「在宅療養生活を維持するための戦略（戦略）」の必要性につながる。この戦略を用いた成果として、「主役の地位の確保」と「家族関係の均衡を保つ」ことが得られる。また、「ルサンチマンの経験」と「ルサンチマンからの学び」がひとり暮らしを選択する起動力になっていた。③中心のカテゴリー（selective coding）：各カテゴリーをパラダイムに基づき関係づけることとストーリーラインを示す作業を通して、「ひとり暮らしの女性高齢者によるルサンチマン」が他のカテゴリーを結びつける中心のカテゴリー（core category）であることが明らかになった。④ルサンチマンの3類型：ルサンチマンに対する認識の状態を捉えて、「反撃」、「転換」、「現実甘受」と命名した。「反撃」は、報復の途上にある状態、「転換」は、ひとり暮らしに積極的な価値を付与している状態、「現実甘受」は、「反撃」と「転換」の間を往復している不安定な状態であった。

### （考察）

①本研究による質的データとニーチェによる公式理論を関連させることについては、「公式理論の具体性を高めること」や「概念の発展に寄与する」とされ、その適用は理論としての信頼性に大きく貢献するといえる。また、いまだにわが国の「女性」、「高齢者」や「病者」が弱者とされ、その地位から脱却していないことを思うと「ルサンチマン」の検討によって主体的な女性高齢者像を導き出す一助になると考えられた。②本研究により抽出されたカテゴリーは、ひとり暮らしの女性高齢者の特徴と看護ケアの必要性を見出すために有用であることが示唆された。③同カテゴリーを変数として扱い、これらを命題間の関係として順序付けることにより、理論としての成立を証明できると考えられた。④同カテゴリーから看護のアウトカムモデルを構築することが可能であり、臨床看護実践に活用できると思われた。⑤ひとり暮らしの女性高齢者が用いた戦略の成果として「主役の地位の確保」や「家族関係の均衡を保つ」が導き出されたが、これらは介護保険制度等に対して、ひとり暮らしの高齢者のQOLを評価する際に活用できる項目である可能性がある。

### （結論）

①ストーリーライン（概念枠組み）から、ひとり暮らしの女性高齢者による「ルサンチマンの経験」と「学び」が、各カテゴリーに影響を与える中心のカテゴリーであることが明らかとなった。ルサンチマンの3類型として「反撃」、「転換」および「現実甘受」が導き出された。②「ルサンチマンから学ぶ」過程において導き出された「ひとり暮らしの正当化」が、ルサンチマンを転換し、ひとり暮らしの積極的な意味付けをしていることが示唆された。③「ひとり暮らしを維持するための戦略」の対象を家族からケア提供者に転換することで、在宅生活を維持するための具体的な戦略が得られた。ケア提供者に介護を担ってもらうことにより、「在宅生活での自尊心の回復」と「家族関係の均衡を保つ」ことが可能になると考えられた。

## 審査の結果の要旨

本研究は、グラウンデッド・セオリー法を用いた質的研究によって、ひとり暮らしの女性高齢者の在宅療養生活を維持する戦略について検討した斬新な研究であり、ルサンチマンの概念を用いて、苦悩の生活体験や悔恨の感情が、ひとり暮らしに価値と意味を付与していることを明らかにした点で高く評価される。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。